

報告

「女性医師の今～女性医師はいかに生きているか？」
を開催して

北海道女性医師の会 会長 守内 順子

「医学生vs先輩医師との懇談会」 3大学開催報告

常任理事 藤井 美穂

医学部女子学生、女性医師の比率は年々上昇し、平成20年の医師国家試験合格者中の女子学生比率は34.5%となった。平成18年の女性医師比率は17.5%となり、平成20年の30歳未満の日本医師会会員の女性比率は38.3%を占めている。これらの数字が示すように、若い世代では4割に達する勢いの女性医師構成である。

しかし、この急激な女性医師の増加に医療の現場は対応しきれていないのが現状である。若い世代の医師、特に女性医師は出産・育児という現実と、難関を通り勉強してきたあと、これから夢を実現するためのキャリア形成の時期が重なるというハンディを越えていかなければならない。

日本医師会男女共同参画委員会では平成18年度から「女子医学生との懇談会」開催に助成金・講師などの派遣を含め、学生・研修医のモチベーション向上を図る目的で応援している。北海道医師会ではこの事業を毎年、主催・共催の形でバックアップしており、長瀬会長自ら懇談会に赴き、学生・若い医師たちとの熱いディスカッションに参加している。

本誌では、平成20年度に開催された道内3大学における「懇談会」の報告を開催順に守内順子先生（北大分）、坂田葉子先生（旭川医大分）、伊藤友紀さん（札幌医大医学部3年学生：札幌医大分）にお願いした。男子学生も含めた医学生、また若い医師たちの生の声が少しでも伝わるように、同時に行ったアンケート結果も掲載した。

伊藤さんは国際医学生連盟(IFMSA)の委員として、女性医師問題に取り組んでおり、今回の「懇談会」の主催を引き受けてくれた。学生自身がコーディネーターのものであり、その主体的な取り組みに今後も期待したい。

昨年10月24日金曜日の夕方、北海道大学の教養食堂“はるにれ”で「女性医師の今～女性医師はいかに生きているか？」というタイトルで講演会・懇談会を開催しました。医師国家試験の合格者の3分の1が女性になった現在、学生や若い医師の方々にとって、先輩女性医師の話聞くことは将来に大きく役立つと考え、この会を企画しました。北大でこのような会を開催するのは初めてのことだと思います。

会を計画した段階で、多くの学生さんや研修医・若い医師の方々に呼びかけたいという思いでポスターを作り、道内3大学に掲示を依頼するとともに、札幌市内の研修指定病院に配布しました。ところが開催当日になって急に冷え込みが強くなり、さらに日中は強い雨風！果たして人が集まってくくださるかと不安な思いを募らせました。しかしそんな不安を払拭するように北大・札幌医大・旭川医大の学生さんがずいぶん大勢来てくださいました。これから医学部を目指す予備校生の学生さんの参加もありました。その上、大学のみならず一般病院の若い医師の方々も多数参加いただき、本当に嬉しく胸躍る思いをしました。

まずは卒業年度が約10年異なる3人の先生に、医師としてのキャリアアップ、家庭生活と仕事との両立（いわゆるワークライフ・バランス）をどのように考え行ってきたかを講演いただきました。



最初は足寄町の我妻病院・院長の池田千鶴先生のお話で、地方で医療を行うことになった経緯や、在宅医療を含めて地方で医療を行う喜びが紹介されました。医師はとても良い職業で、努力は達成感をもたらし、大変さはやりがいに通じること、またプライマリー・メディスンは女性に向いていて、無理なく働ける分野であることが話されました。最後に「自分の人生を上手にデザインし、自己実現に向けて努力しましょう！」と池田先生から後輩達に向け力強いエールが送られました。

2人目は北大第一内科・准教授の別役智子先生でした。先生はご自分の夢を一つ一つ実現されたその課程を症例報告のように話され、場内は和やかな雰囲気になりました。医師になった後で何度か岐路に差しかった時も、ご自分の夢に向かって進むためにいろいろなものを取捨選択して現在に至っている、というお話は非常に印象深いものがありました。小さな頃からの夢であった米国留学で大きく人生観



が変わったこと、家族を持つことや子育ては最大の喜びであること、子育てとは子供がごく幼い時だけではなくずっと続くものなのであると述べられました。子供が小さいから仕事を辞めるという道を選択するよりも、状況に応じて仕事の量やペースを変える方が賢明であることを痛切に感じました。



最後は若手の病理医として北大病院で活躍中の久保田佳奈子先生で、2歳のお子さんの育児をしながら、病理医としての仕事をこなされている日常を紹介していただきました。子育ての大変さを毎日実感されている今、

24時間対応してくれる“北大病院保育園ポプラ”と同僚の方々の理解にずいぶん助けられていると繰り返し述べられました。学生時代に各医局をローテーションしている間に、既にその医局の就労・職場環境を細かくチェックされていたそうです。女性医師が働きやすい環境を整えることは、女性医師の仕事に対するモチベーションを維持するのに役立つだけでなく、医師数・戦力が増えることにより男性医師にとっても仕事をしやすい勤務環境になるのだという思いを強くしました。

講演のあとは学生さんと医師達が入り交じって4グループに分かれての懇談になりました。どのグループも和気藹々話はずんでいましたが、会場の関係で、話が盛り上がっている最中に終わりの時間が来てしまったことは、残念でした。

最後に北海道医師会の常任理事で、当会の理事もお引き受けくださっている藤井美穂先生から「仕事も家庭も両立させて生き生きと頑張りましょう！」というお話をいただきました。

会が終わってからも、皆様まだまだ話が尽きないといったようで、会場のあちこちで話の輪ができており、「次回は1月10日に札幌医大で会を開きます」とアナウンスしましたところ、是非次の会にも参加したい、とおっしゃる方がたくさんおいでになり、本



当に開催して良かった、と嬉しく思いました。

会の開催に努力くださいました当会の理事の塚本江利子先生(セントラルCIクリニック)、別役智子先生(北大第一内科)、新谷朋子先生(札幌医大耳鼻咽喉科)に感謝いたします。

この会は日本医師会・北海道医師会に共催いただきました。北海道医師会の方々には、当日お手伝いいただきましたことをこの場を借りてお礼申し上げます。

「第5回 医学部医学生と女性医師の語る夕べ」の報告

旭川市医師会女性医師部会 坂田 葉子

旭川市医師会女性医師部会の主要な活動の一つ、旭川医科大学の女子医学生との懇談を目的とした「医学部医学生と女性医師の語る夕べ」が、11月12日(水)、医師および学生計43名の出席を得て、旭川医科大学機器センターカンファレンスルームにて行われました。5回目となったこの会の今年のテーマは「女性医師を支えるパートナーとして」。昨年までは、「生涯において、いかに女性医師という仕事を継続させていくか」を中心とした懇談が主でしたが、今年はちょっとコーヒープレイク的な話題としてみました。

まず、旭川医大二輪草センター特任助教堀仁子先生に「旭川医大医学部学生の育児に関する意識調査結果報告」をしていただき、次に、旭川厚生病院小児科主任部長坂田宏先生に、「僕たち二人の歩んできた道—自分流のサポートの仕方—」と題したお話をしていただき、小グループに分かれ、グループディスカッションを行いました。和気藹々とした、賑やかな会話に時を忘れてしまうほど。参加される学生さんたちの数は決して多くはありませんが、皆さん、しっかりと目的を持って会に参加されるようになってきたように思われます。自分の将来設計を頭に描きつつ、熱心に質問していた男子学生さん(この方の奥様は、研修医なのだそうです)も印象的でしたが、今年は、社会人入学された方の参加が目立ちました。医学部全体の方針で社会人入学の方が増加してきているようですが、彼女らの話を通して、女性の場合は男性と比較し、自分の年齢がひとつの足かせになってしまう可能性があり、きちんとした対策の必要性を改めて感じました。時間を忘れてしまうほど、あっという間の2時間半でした。共催していただき、いろいろご協力いただいた旭川医大二輪草センタースタッフの皆様には深謝いたします。

参加された学生さんたちの感想を紹介させていただきます。また、旭川医大二輪草センターの堀先生の「旭川医大医学部学生の育児に関する意識調査結

果報告」はとても面白い内容でしたので（土地柄のせいか、九州では全く違う統計が出るそうです）、併せてご紹介させていただきます。

〈参加された学生さんの感想から〉

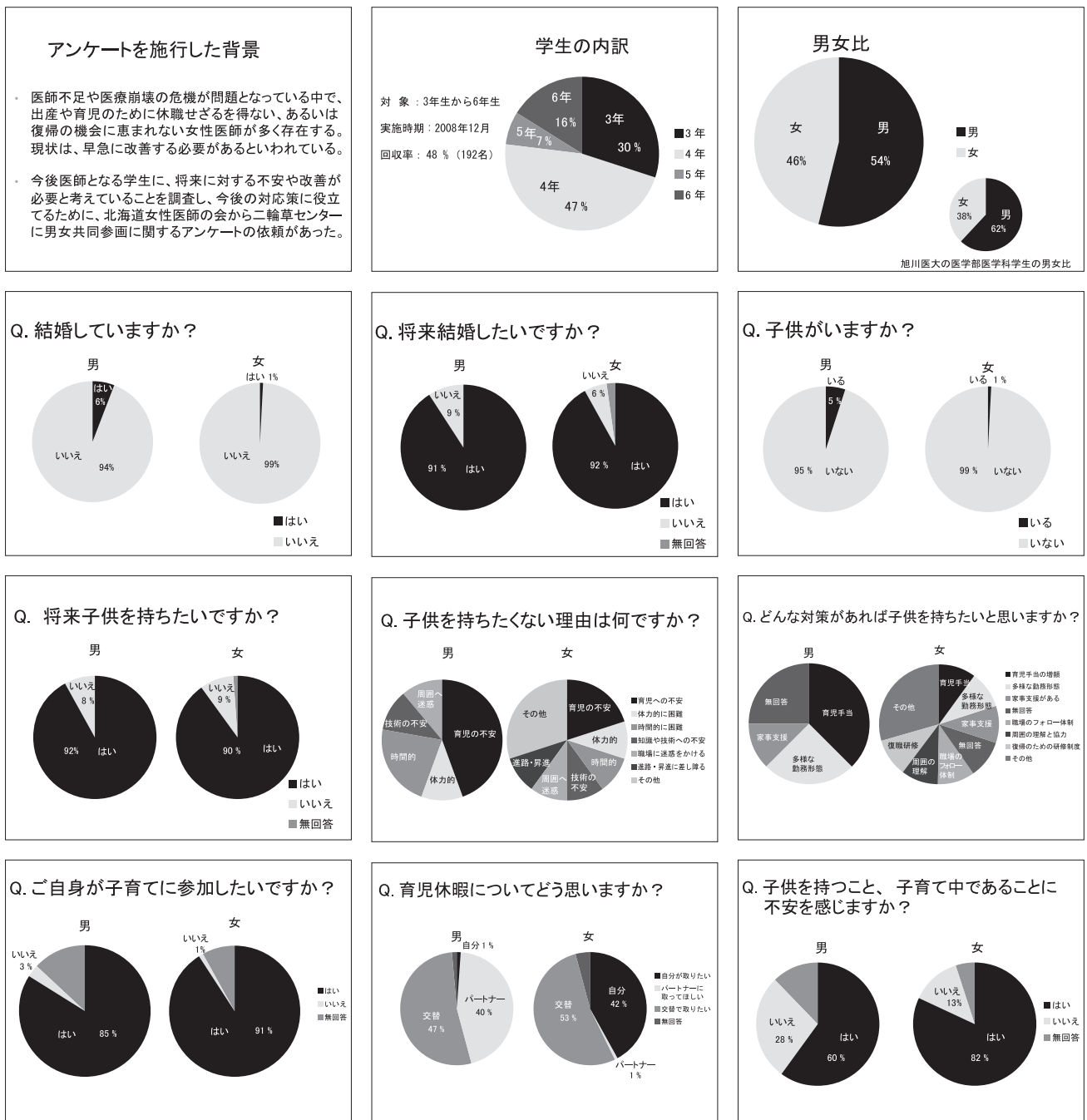
- ・1年生：出てみるだけ出てみようと思った程度の気持ちで参加しましたが、大変勉強になりました。女性医師のお話を聞いて、これからの指針を考えるのにとっても参考になり、またこのようなグループ懇談を行っていただけると嬉しいです。
- ・2年生：先生方の貴重なお話を聞くことができ、有意義な時間になりました。将来を考えて不安に思うことが多かったのですが、たくさん選択肢が

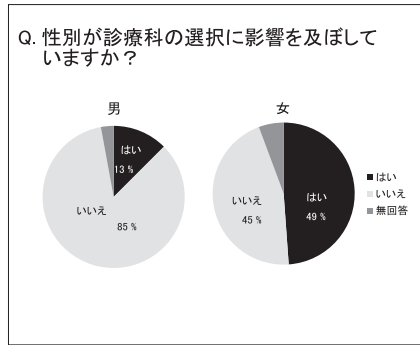
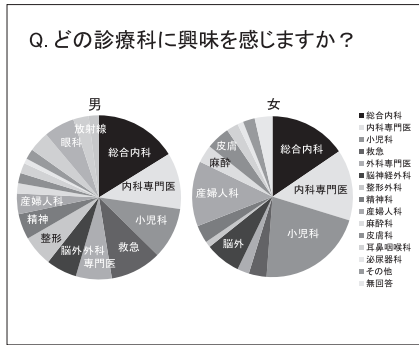
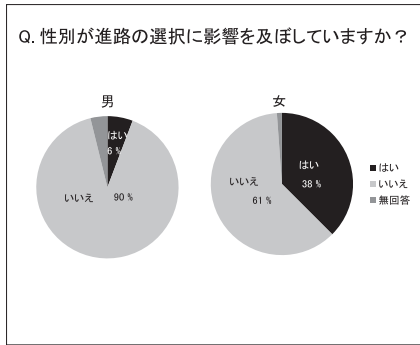
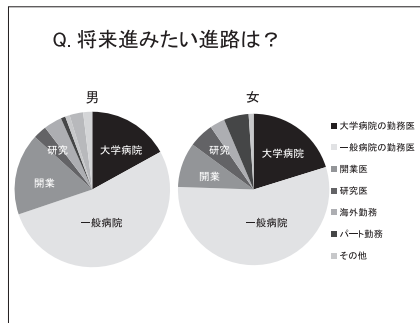
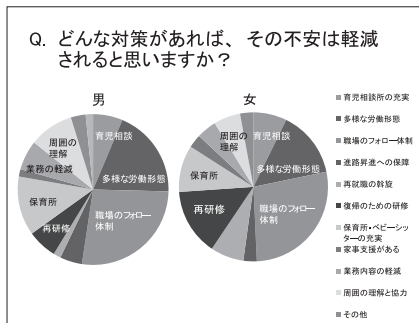
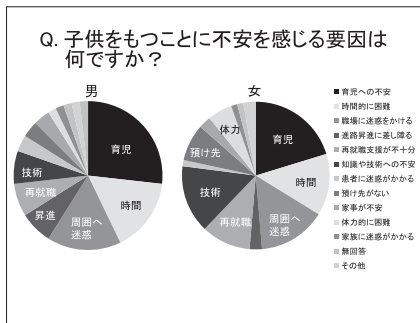
あることを知り、心強く思いました。

- ・3年生：とても参考になる貴重なお話をありがとうございました。講演会、懇談会ともにとてもためになりました。また機会がありましたら、ぜひ参加させていただきたいと思います。
- ・4年生：開業医、市中病院・大学病院での勤務医など、さまざまなところで働いていらっしゃる女性医師の方たちの話を、ロールモデルのようなかたちでもっとお聞きしたいです。
- ・5年生：現役の先生方のお話を直に聞けるのは、貴重でした。来年度は、男子学生を巻き込んでの開催ができると、さらに良くなると思います。

【旭医だより No.118】にも掲載されております。

旭川医大医学部学生の育児に関する意識調査結果報告





アンケート調査から

- 男女ともに多くの学生が、将来子供を持ち育児に参加したいと考えている。(育児休暇を交代で取りたいと考える学生が男女ともに約半数いる。)
- 子育てに対して不安を抱える学生が多く、その対応策として多様な労働形態、職場の理解、復職研修、保育所の充実などを希望している。
- 将来大学病院や一般病院への勤務希望者が多く占める。
- 現在（女性）医師の入局者が少ないとされている診療科を選択したいと考えている学生も多くいる。

その他の意見

- 女性は子供を産むという生物学的特徴を持っているので、何らかのフォローをする必要があるが、男性側としては何をどのくらい支援すれば良いのか知りたい。(4年男)
- 女性医師の労働条件の改善は絶対必要だが、男性医師の労働環境を改善しなければ、女性医師の負担も減らないと思う。(4年男)
- 男女をすべての面で等しく扱うのではなく、男女のそれぞれの特徴を生かした共同参画を望む。(4年男)
- 医療現場に女性の存在は不可欠であるので、同僚としてサポートできることがあれば協力したい。(4年男)
- 男性のみならず、女性も人生にはさまざまな選択肢があり、それをどのように選択するかは個人の自由で尊重すべき。また、お互い様という助け合いの精神が根付いてほしい。(4年女)
- 差別と区別の混同がされないことを望む。(5年男)
- 育児に対する支援を強化してほしい。子供がいることが理由で、科の選択肢が狭まるようであれば支援できているとはいえないと思う。(5年女)
- 医師になりたいという思いと、家庭を持ちたいという思いに優劣はない。両立できるような支援体制を望む。(3年女)
- 二輪草プランを知って、旭川医大でなら子育てしながら働くことができると思った。(3年女)
- 男性も家庭を大切にできる労働環境が欲しい。男性医師が育児休暇を取得しにくい雰囲気がある。(3年男)
- 女性は、出産や育児など男性よりも大変なことが多いが、興味ある仕事を続けられることは良いことなので頑張してほしい。(3年男)
- 男女とも勤務医夫婦の子育ては大変だと思う。どちらかが勤務時間を減らさなければ、子供の教育に良くないと思う。(3年男)
- 出産や育児で離職した女性の復帰が困難なのは医学界だけの話ではない。上手に対応している企業を参考にすべき。(3年男)
- 医師が皆疲弊しているのをまずどうにかするべきだ。(3年女)
- 医師免許がある限り、勤務地を変更しても医師であり続けることが可能であり、恵まれている環境にあると思う。(3年女)
- 30歳までに子供は1人は欲しいと思っていたが、復帰可能なのが不安。男性側の育児休暇を増やしても、取得する人は少ないであろうから、まずは女性の支援に重点をおいて欲しい。(3年女)
- 結婚出産を考えて科を選べとよく言われるが、忙しいといわれる科ほど女性医師に対する配慮が足りないのではないかと感じる。(6年女)
- 学生ですら子供がいたら厳しい現実、社会的制約があることを考えると将来にあまり期待ができず、やはり女性は大変だ。(5年女)
- 女性の働く環境を整えられないのなら、女性の入学を制限した方がよい。しかし、環境を整え医師を増員する方が賢い。(5年男)
- 男だ女だと仰々しくするのは好きではない。同じ人間なのだから、やりたいようにやればよい。(3年男)
- 出生率を上げるには、男女共同参画社会を廃止するべき。(4年男)
- 北海道男性医師の会を作って欲しい。(4年男)

二輪草センター

- 育児と仕事の両立に対する相談窓口
- ロールモデルの提示
- 各診療科へ育児支援の働きかけ
- 女性医師のみではなく、男性医師も子育てに参加しやすい環境づくり

第3回 女性医師と医学生のおしゃべりフォーラム —医師のさまざまな働き方—

実行委員会代表 伊藤友紀
札幌医科大学医学部 3年

日時 平成21年1月10日（土）13:00～16:00
場所 札幌医科大学基礎医学研究棟5階
大会議室

開催趣旨

女性医師の占める割合が増えてきている今、女性医師の働く環境や家庭生活との両立についてみんなで考えていくことが大切であると思う。性別に関わらずすべての医師・医学生が女性医師の働く環境について考えることは、現在の日本の医療をより良いものにつなげると考える。

しかし、医学生が将来に対する疑問や不安、悩みを打ち明ける場があまりにも少なく、将来どのように働くかイメージしにくいのではないかと感じる。医学生が自由に医師と話をし、自分たちの将来を考え、医師として働くことについての疑問や不安を共有できればと思い、開催に至った。

講演会・懇談会の状況

実行委員会代表、北海道医師会会長である長瀬清先生、北海道女性医師の会会長である守内順子先生からの開会挨拶後、講演に移った。

昨年のフォーラムで、多くの参加者からさまざまな立場の先生のお話を聴きたいという意見が挙がったので、今年は「医師のさまざまな働き方」をテーマに、さまざまな年代、性別、立場にある5名の医師に講演をしていただいた。

藤井美穂先生（札幌時計台記念病院産婦人科）、永石敬和先生（国立西札幌病院消化器科）、矢嶋彰子先生（札幌医大第一外科）、湯野暁子先生（勤医協中央病院内科）、正木智之先生（札幌医大耳鼻咽喉科・第二病理）よりそれぞれ医師としての働き方や家庭との両立について話していただいた。女性医師の置かれている現状やキャリア形成の話から、仕

事と家庭を工夫して両立している様子など幅広い経験談を伺うことができ、とても参考になったという声がたくさん聞かれた。

講演の後、脳外科女医会のアンケート結果について、笹森由美子先生（高橋脳神経外科病院）から紹介していただいた。また、濱田啓子先生（北祐会神経内科病院）からは、北海道女性医師史「北の命を抱きしめて」についての紹介をいただいた。

残り時間が少なくなりましたが、最後に4グループに分かれてフリートークを行った。話がはずみ楽しい時間を過ごすことができた。学生からは先生方の本音を聞いてよかった、勇気もらったという感想が聞かれ、医師からも学生がどのようなことを知りたがっているのか分かってよかったという声が聞かれた。

アンケート結果について

フォーラム終了後、参加者に感想と「勤務環境の整備について、勤務先に望むこと」という題で意見を書いてもらった。詳細は、アンケート結果④のとおりである。

多くの学生や医師が、24時間保育所が必要であると考えていることがわかった。医師としての仕事と育児とを両立するためには必要不可欠であると考えられる。しかし、24時間子供を預けられるという理由で長時間勤務をさせられるということが起こってはならず、職場の理解や配慮が大切になると思う。また、男女問わず産休や育休が取りやすいことや復職支援の仕組みも必要である。これらを利用するための情報もまた必要であり、今回のフォーラムも情報交換の場になったのではないかなと思う。

全体を通して、多くの学生が将来医師として働くことや家庭との両立について不安を持っており、さまざまな働き方を知りたがっているということがわかった。それぞれ工夫しながら充実した医師生活を送っている多くの先生方のお話を伺うことができ、学生はとても励まされたと思う。また、日本における女性医師の勤務環境はまだ改善される余地がたくさんあるということも認識されているので、今後も学生としてできることを行動に移していければと思う。

『第3回 女性医師と医学生のおしゃべりフォーラム』 ～アンケート結果～

回収枚数：学生16 医師10

① 企画を知ったきっかけ、参加理由

- ・ 実行委員の学生から 8
- ・ 北海道女性医師の会を通して（守内先生、新谷先生） 5
- ・ ポスター 5
- ・ IFMSAでの宣伝 5
- ・ Mailing List 3
- ・ 以前もフォーラムに参加したことがあって 2
- ・ 友人に誘われて 2

- ・ いろいろな先生の話を知りたくて
- ・ キャリアとプライベートの両立、それを取り囲む社会システムに興味があったから
- ・ 女性医師を目指す身として、先生方のお話を聞きたくて

② 講演の感想

《学生》

- ・ 結婚、出産、育児と仕事の両立をするためには、周りの支援やお金が大切と感じた。後は意志だ！と強く感じた。モチベーションが大切だし、演者の先生方は輝いていると感じた。(1年)
- ・ まだ2年で研究、臨床などいろいろな将来を考えている中、さまざまな女性医師の働き方、サポートして下さる方々の話を聞いてよかった。(2年)
- ・ 実際に子育て、出産を経験した女性医師の体験談を聞くことで、自分の将来を考えるときにすごく参考になると思った。(2年)
- ・ 先生方の背景やキャリアがさまざままで、それぞれ参考になることがあったし、あまり考えすぎなくても人それぞれでいいのだと励まされた。(3年)
- ・ 先生方のお話を聞くのは面白く、参考になった。働いているだけですごく大変なのに、結婚や出産もなさっていて、本当に感心してしまった。(3年)

- ・いろいろな女性医師のお話を聴けて、とても勉強になった。子育てと仕事の両立は大変だということは思ったが、皆さんとても生き生きとされていて、目標を持ってがんばっていらっしゃるのを見て、将来こんな風になりたい!!と思った。(3年)
- ・藤井先生のお話が非常にエネルギーで面白かった。「女性医師」「女医」という概念がなくなる日も近いのかなと思った。(4年)
- ・とても参考になった。そしてとても楽しかった。次回も参加したい。(4年)
- ・それぞれ違ったスタイルの育児、医師としての勤務をされていて、さまざまなアドバイスやお話が聞けてとても参考になった。知らなかったサービスも知れてよかった。(4年)
- ・女性医師が家庭をもちながら働き続けるには、夫や勤務環境、育児施設などさまざまなサポートが必要になり、それをうまく活用していくすべも必要だと思った。いろいろな先生方のさまざまな働き方を知ることができて、要は自分のモチベーションと周りの支えがあればどんな働き方でもやっていけるということがわかった。(5年)
- ・先生方の自分史、実際の生活等を垣間見させていただき、漠然と捉えていた結婚後の仕事との両立というものがより具体性を帯びて知ることができた。男性の家庭への参加に対する理解と協力とともに、職場環境の理解と支援整備が進めばよいと思うし、そのためにも意見が上がり、そして吸収していく組織が作られていくと思う。(5年男)
- ・自分の選択肢にある進路を実践してきた先生方のお話が聴けてとても参考になった。(5年)
- ・多くのががんばっている女性医師の方々がいると思って心強く思った。(5年)
- ・実際の先生方の生活を知ることができ、将来について考えるととても参考になった。先生方が大切にしていること、言葉に触れ、今後の人生に活かしていこうと思った。(5年)
- ・それぞれの先生の経歴、仕事、子育ての仕方が多用で、いろいろな働き方があると知れて大変よい機会になった。(5年)
- ・内容がとても充実していて、たくさん話を聞けてよかった。(9年)

《医師》

- ・さまざまな働き方に出会えてとても参考になった。
- ・実際的な話が多く、有意義だった。
- ・各講師とも素晴らしい内容で素晴らしい講演だった。学生だけでなく、今働いている私たちにもとても参考になるものだった。
- ・留学体験、外国で1人で出産など、すごい勇気があると思った。
- ・こんな男性Dr.が増えると医師の退職が減り、ワークシェアが進むのではと思った。
- ・自分史が聞けたことも感激。ずっと前にいる先生のがんばりはすごい。
- ・たくさん優秀なDr.の話を聴けてよかった。
- ・キャリアのある先生方ばかりのお話だった。
- ・多様な育児と仕事の両立法を改めて身近に知るととても貴重な機会だった。

③ フリートークの感想

《学生》

- ・とても勇気をもらった。女性医師がもっとがんばって活躍しようと感じた。(1年)
- ・研究と臨床ともに経験のある若い女性医師の話をじかに聴けることは少なく、貴重な時間になった。(2年)
- ・身近にお話ができよかった。自分でも聞きたいこと、心配なことを整理してから来ればよかったというは反省。(3年)
- ・実際に自分の不安を聞いてもらったり、先生方の本音を聞いたりしてすごく楽しかった。(3年)
- ・短い時間の中でたくさんのお話が聞けてとても充実していた。女性医師であることはデメリットであるのではなく、女性医師でなければならないこともたくさんあるとわかった。そして、自分の働きやすい環境は作ったり選んだりしていかなければならないと思った。(3年)
- ・出産、育児や女性医師として働くことに対する不安はあったが、先生方の生の声を聴けて安心というか自信を持てた。(4年)
- ・とても参考になった。どの先生も仕事を楽しんでいる感じが印象的だった。またこのような機会があれば参加したい。(4年)
- ・自分の基礎をしっかりと作って、復職しても必要とされるだけの人間の魅力も大事であると思った。体力的にはどうとでもなるという力強い言葉を聞き、自分の情熱さえあれば大丈夫だと思った。(5年)
- ・先生方より個人的なお話が聴けたのはよいと思う。(5年男)
- ・聴きたいことが聴けてよかった。(5年)
- ・講演の内容に関してさらに詳しい部分で話をうかがうことができた。(5年)
- ・とても気さくな先生方で、お話ししてとても楽しかった。自分が医師になることについて自信を失いかけていた時期だったので、勇気・自信が出た。(5年)
- ・少し時間が足りなくなってきたが残念だったが、それぞれの先生の熱意が聞けてよかった。(5年)

《医師》

- ・先輩医師の話が聴けてとてもよかった。
- ・もう少し長い時間フリートークができればよかった。

- ・短い時間で、あまり話ができなかった。
- ・時間が短くて少し残念だったが、とてもすばらしい時間を共有できた。
- ・楽しい時間が持てた。
- ・医学生とお話しできてよかった。
- ・学生がとても具体的なモデル(事例)を知りたがっていることがわかった。
- ・ともかく時間が足りないと思う。新谷先生、堀本先生の話が面白かった。

④ 勤務環境の整備について、研修先に望むこと

- ・保育所 15
 - 時間の延長、24時間
 - 院内保育所(近くにあること)
 - 特に病児保育
 - このような設備がないと安心して道内医療に携わることができず、故郷に帰らざるを得ないかもしれない
- ・職場(上司、同僚)の理解、意識改革 8
 - 仕事と家庭のメリハリが付けられるように
 - 家庭状況等、個人々の事情を理解、要請をくんでもらえること
 - 自由に意見が言える風通しのよさ
 - 妊娠していたり子育て中の女性医師への配慮
- ・出産・育児に対する支援(産休、育休の取りやすさ) 7
 - それがなくて働くことを辞めてしまう女性医師がいることが医師不足の原因の1つであるとも思う
- ・男性の理解、意識改革 4
 - 男性にもフォーラムに参加させたり、女性医師の感じていることを伝える場がシステムとしてあればいい。
 - 中高年以上の男性医師、事務幹部の女性医師に対する意識改革
- ・フレックスタイム 4
 - 正規の短時間勤務
 - 子育て期間の当直などの制限
- ・復職の支援、情報交換 3
- ・家事や子育ての支援(ベビーシッターなど) 2
 - その情報が入りやすいことも大切、紹介システムの企画
- ・子供を連れて行くのを可能とする職場が増えたらよい
- ・融通の利く環境
- ・ワークシェア
- ・医師も労働者であるという認識が必要
- ・代替医師の存在、システム
- ・医師本人が選べる秘書をつけて欲しい
- ・当直室の改善
- ・女性医師の休憩室
- ・色々な学習プログラムを研修医に提示してもらい、選択肢を増やして欲しい
- ・早く専門医認定できるようなプログラムを考えて欲しい
- ・子、親とその親で多世帯居住できる住宅を安価で用意して子育て支援
- ・医学部定員増加や施設の無駄な増改築より、附属病院での勤務環境・システムをよくしていくほうが大切なのではないか。新しく医師を増やすよりも、ドロップアウトする医師を減らすことを大学側に考えて欲しい。

⑤ 企画の改善点

- ・フリートークの時間がもっと長い方がいい。 7
- ・講演が長かった。(Dr.)
- ・フォーラム後にお食事があつたら参加したい。(5年)
- ・もっと頻繁に開催して欲しい。(5年)
- ・日常的には小さな茶話会のようなものをしていったらどうか。出てきた問題点を病院長などに対し要望として届けていくことが必要だと思う。(Dr.)
- ・大学の教室の医局長や病棟医長などが参加してくれるといいと思う。(Dr.)
- ・社会システム、制度の整備を要求していくための世論の形成を進めていくためにも、新聞社やテレビ局などに声をかけてもよかった。(5年)
- ・どの会も講演が長くなり、その後のグループ・ディスカッションの時間が不足してしまうよう。一人ずつの講演をやめて、基調講演あるいは問題提起として一つだけ講演してもらい、勤務医・女性医師問題や医療の現状を総括してもらってから、全体ディスカッションに入るといいのではないかと考えた。女子学生からはさまざまな質問が山ほどあるだろうし、グループを移って、他の先輩医師の話をきく時間もなさそうであるから、全体で話し合う方がいいのではないかと。

学生	vs	(1) 研修医グループ
		(2) 内科系医師グループ
		(3) 外科系医師グループ
		(4) 行政・研究機関医師グループ